



津軽天然藍染

藍染は江戸時代に確立し、各地方で自給され、城下町では、絹屋町などの名称がその名残を留めている。藍染は天然染料の代表的染色技法で、濃い色の中にも透明感のある美しさがある。また、染めては洗ひ、空気酸化させることを繰り返して、色落ちのない堅牢な染色が大きな特徴である。



りんご染

りんごの手入れ作業で四季折々に出る剪定枝・摘花・摘葉・樹皮など、まさにりんごをまるごと天然染料としていかしたものである。生地は主に綿、シルク、麻などを用い、装身具などの小物、袋物、その他工芸品にアイテムをあげ、特有の優しい彩り豊かな数々の製品を生み出している。



弘前の伝統工芸品

- 青森県が指定する工芸品
- それ以外の工芸品

津軽塗

津軽塗は、主にヒバの木地を用い、塗り、研ぎを繰り返して、最後の磨き上げまで、約50工程を経て完成される堅牢優美な伝統的漆器である。唐塗、なご塗、紋紗塗、錦塗の伝統的な4つの技法は現在まで脈々と受け継がれ、現代風のアレンジも加え、多様な紋様を生み出している。(昭和50年国の伝統的工芸品指定)



フナコ

フナコは昭和31年、当時の青森県工業試験場で研究開発され、民間企業の手で商品化された。主にフナ材を用い、薄いフナのテープを巻いて押し出すというフナコ独特の成形技術は、割れ、狂いのない高品質な製品を作り出している。今では、照明・インテリアと幅を広げ、弘前が誇る新しい木のクラフトとして海外からも注目されている。



津軽ごきん刺し

津軽のごきん刺しは、江戸時代、農村の女性が野良着の麻布を木綿糸で刺して保温と補強をした「刺しこ」から発展している。藍染めの麻布の織り目に沿って、白い木綿糸で規則的に刺すことで、「津軽ごきん刺し紋様」と呼ばれる独特な幾何学模様を生み出した。現在では多彩な色合いのごきん刺しが作られ、生活雑貨からファッションまで製品も多様である。



津軽打刃物

藩政時代には多くの鍛冶屋があり、武器、農具、工具、包丁などを製造していた。現在では少数となったが、伝統的な火造り、「泥塗り」などの焼入れ技術を受け継ぎ、優れた切れ味と耐久性に富んだ品質の高い包丁類が生産されている。また、りんごの産地である津軽には欠かすことのできない摘果・枝切り用の剪定鋏も高い品質を誇っている。



津軽焼

津軽焼の源流は、元禄4年(1691年)に平清水三右衛門、瀬戸助、久兵衛らによって築窯された平清水焼、後に興された大沢焼、下河原焼、悪戸焼にある。大正末期頃に悪戸焼が廃窯となって途絶えてしまったが、昭和に入って再興が果たされ、現在に至っている。黒天目釉・海鼠釉・りんご灰釉など多様な釉薬が醸し出す独特の色合いは、素朴さと芸術性を兼ね備えた焼き物である。



下川原焼土人形

文化年間(1804年~1814年)に9代藩主寧親が津軽の地に玩具が少ないことを憂いて、下川原にあった藩窯の陶師、高谷金蔵、太田桑次郎らに作らせたのが始まりといわれている。主に冬期間を利用して作られていたが、廃藩後は本業として種々の人形を作るようになった。現在、約200種の伝来の型があり、特に「鳩笛」「雛人形」などが親しまれている。



あけび蔓細工

江戸時代から、津軽地方には、豊富なあけび蔓や山ぶどう蔓などの材料を使った様々な編組品があった。編み方には編み、こだし編み、グニ編みなど色々あり、その模様も様々である。自然の素材の特長を生かし、温かさを持った美しい編組製品として需要が高く、民芸品としても全国的に高く評価されている。



津軽竹籠

東北には「根曲がり竹」という根元の曲がった耐久性に優れた竹がある。「りんごの手かご」として知られる竹細工は、この根曲がり竹で作られ、愛宕地区で生産されている。他産地の竹製品とは異なり、六角の模様も様々である。また、こけし作りとともにこまやダルマなどの木地玩具も盛んに作られ、地域の人々に愛されている。



弘前こけし・木地玩具

津軽系こけしは、黒石市、大鰐町、弘前市で作られたこけしの総称である。明治時代から、津軽地方内の木地師および津軽と他県の木地師との交流が盛んに行われており、弘前こけしは、その中でも大鰐産の流れをくむものとして現在に受け継がれている。また、こけし作りとともにこまやダルマなどの木地玩具も盛んに作られ、地域の人々に愛されている。



津軽扇

藩士の手内職として、江戸時代から作られるようになったとされており、津軽特産のヒバ材を使用した骨組に、浮世絵や三國志、水滸伝等の挿絵をもとにした武者絵を特徴としている。そこには武士の魂が込められており、津軽の風土に育まれ、現在に受け継がれている。



錦石

古くは室町時代より「陸奥の錦石」として名高い青森の錦石は、碧玉、めのう、玉髓などの石英に各種金属イオンが混入したことにより、複雑で格調のある色彩が交錯したものである。現在では、観賞用の美石のほか、指輪、ブローチなどの装飾品として広く活用されている。



津軽桐下駄

日本人の履物として古代より用いられてきた下駄は、江戸時代になって広く流行し、津軽においても隆盛を極めた。下駄の材料には桐が最も適しており、軽い・柔らかい・反動が少ない、温度変化が少ないなどの特徴がある。津軽の桐は、木質も堅く、木目も美しい。白木の下駄のほか、雪下駄、津軽塗下駄など、しっとりした雰囲気を持っている。



太鼓

1本の木をくりぬいた胴に馬や牛の皮張りをして仕上げるのもちろんのこと、桶作りの手法を用いた太鼓作りがねぶたの地弘前ならではの製品。直径4メートルの「津軽情」張り太鼓も地元で作上げた名品である。



金魚ねぶた

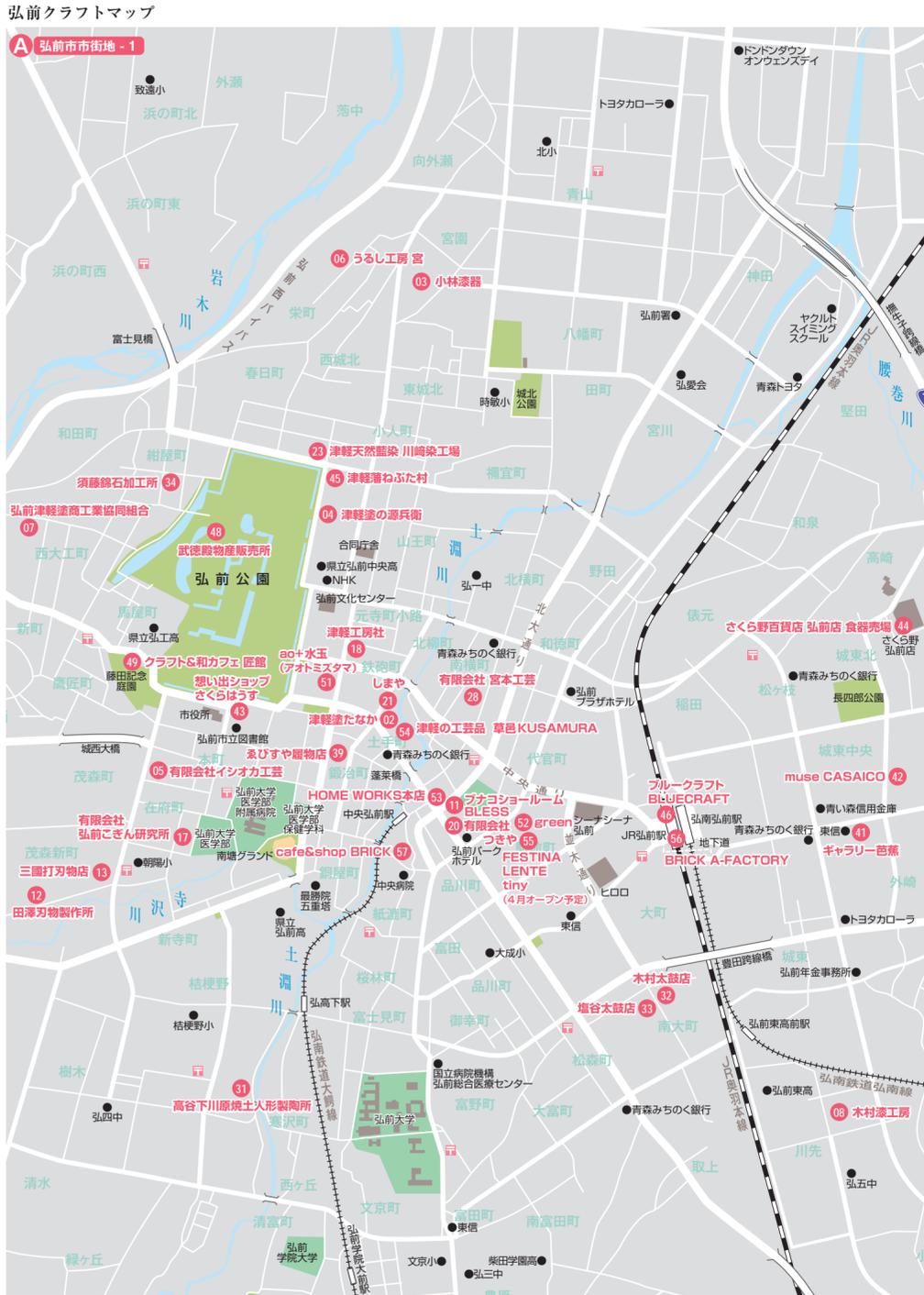
津軽の祭りに欠かすことのできない夏の風物詩「金魚ねぶた」。弘前ねぶたは、1722(享保7)年に初めて文献に登場して以来、様々な形のねぶたが時代を彩ってきた。江戸時代、金魚は一部の上流階級の間でしか飼うことのできなかつた高級魚であった。それをねぶたにして子供たちに祭りや提灯のときに持たせ親しみたといわれる。「金魚」はその名の通り幸運をもたらす幸福を呼び起こす縁起物として長きに亘り、庶民に親しまれている馴染み深い工芸品である。



津軽伝統組子

津軽伝統組子は、飛鳥時代から約1300年以上続く建築物の装飾として受け継がれている組子の一種。細く挽いた木に溝や穴、ホソを彫り、直線的ないくつものパーツを組み合わせることで、立体的で複雑な幾何学模様を描くことが特長である。その技法は多岐にわたり、屋内装飾、行燈、衝立、屏風、球体のランプシェード、バッグなど幅広い製品を作り出すことができる。





※工房の見学は事前に各工房までご連絡をお願いします。